

若者ことばの文法性と非文法性の表現
A Study of Certain Grammatical and Non-Grammatical Expressions in
Spoken Japanese among the Youth

王崗/方韻
深圳大學 / 香港中文大學

要旨

現代日本語における若者ことばは、独特な表現形式をとっていることが多い。そのため、文法面で普通の日本語表現とは異なる部分が多いと思われるが、通常のルールに従っているところもある。例えば、「すごい味」という表現における「すごい」は、形容詞として機能している。「ツボにはまる」の「ツボ」は、従来の意味とは異なるので若者以外にとって少々理解しづらいかもしれないが、名詞であることに変わりない。

その一方、若者ことばである以上、文法的に通常の日本語からずれている場合もある。端的な例では、「すごい寒い」や「マジむかつく」があげられる。前者の「すごい」が形容詞で、後者の「マジ」が形容動詞であるものの、日本の若者たちはいずれもそのままの形で用言の前に用いている。

本稿は日本語の若者ことばにみる文法的表現と非文法的表現を検討するものである。

キーワード:

若者ことば、文法性、非文法性、表現、機能

1. はじめに

現代日本語における若者ことばとなると、その通常の日本語にあわない特徴的用法が特別に目に付く。例えば、若い人が使う「ツボ（つぼ）」という表現がその一例である。「ツボ」は、もともと名詞であり、人体の定まった部位などを示すものだが、日本の若者たちは「ツボな曲」や「ツボなアイテム」と形容動詞（な形容詞）のように用いることがある。もう一つ例をあげよう。「すごい」は完璧な形容詞ではあるが、日本の若い人が「すごい寒い」のように用いることが普通であり、「すごく寒い」というのが逆にあまり頻用されなくなっているように思える。

このように、若者ことばを詳しく観察すると、さまざまな非文法的表現が発見できる。とはいえ、日本の若者たちがみんな非文法的表現ばかりを愛用しているかという、そうではないことも多い。「すごく寒い」とか言う若者がまだいるし、「ツボにはまる」のように「ツボ」の文法的な使い方をする若者もいる（ただ、そういう場合になると、それらがまだ若者ことばなのかという疑問がときにはないわけではない）。

従って、総じていえば、現代日本語の若者ことばに文法的表現と非文法的表現が同時に存在しているということは否めない事実だといえる。言葉というものは、現実の世界に存在する以上、それに対して研究する価値もあれば、必要もある。若者ことばにおける非文法的な表現は、いわゆる日本語の乱れを招くものだと批判されていても、現実の現象として存在している以上、別に完全に消えるわけではない。さらに、「すごい寒い」というように、最初に一般的に非文法的な表現だと思われていながらも、現在すでに普通の言い方に変身しつつあるケースもみられる。その意味で、好意的に現代日本語の若者ことばの各用法に留意する必要がある。本稿は、そういう立場から、現代日本語における若者ことばの文法性と非文法性の表現を見比べ、その特徴や要因などを突き止めたい。

2. 接辞の表現にみられる文法性と非文法性

日本語は接辞が比較的発達している言語だと思われている。「超現実」の「超」で代表される接頭辞や、「論理的」の「的」で代表される接尾辞は、いずれもその典型的な例にあたる。そして、その接辞は、生産性がかなり高い。例えば、「～的」を例

にとると、「社会的」、「機械的」、「民族的」、「人間的」、「大陸的」、「心理的」など多数とりあげられる。こういう接辞は、むろん若者ことばにおいても頻用されているが、文法的だったり非文法的だったりすることがある。以下分析する「～系」と「超～」はその中の二例である。

2.1 「～系」

「～系」の意味用法については、『デジタル大辞泉』¹に「1. ある関係をもって、一つのつながりやまとまりをなすもの。系統。「一つのーを形成する」 2. 名詞に付いて、一つのまとまりのある関係にあることを表す語。「理科ーに進む」「外資ーの企業」「太陽ー」「銀河ー」「MKS 単位ー」（略）」と記されている。この中で2.の部分はいわゆる接辞の「～系」に相当するものであるが、その語例からみれば、日本語で「～系」で複合される語が多いことがある程度わかる。そして、上掲の記述からして、「～系」に名詞が前接することは、文法的に正しい使い方であるといっている。こういったルールにそって若者ことばを見渡すと、ぴったり一致した例が容易に入手できる。「原宿系」、「ギャル系」、「草食系」、「秋葉系」、「野菜系」などたくさんあげられる。つまり、若者たちの間でも、日本語のルールや伝統をきちんと守る一面が見て取れるのである。

しかし、若者といえ、反伝統や反規範という性格がいつも身についている。日本語の使用にみられる脱ルールのケースからもそれが読み取れる。再び「～系」に目を向けると、驚くことに、「原宿系」のほかに「かわいい系」、「ご飯を食べる系」、「ありえない系」などと、形容詞、短文、動詞の後にかなり自由に用いられる用例が大量に見つかっている。前述した日本語の規範からみれば、そのいずれも非文法的使い方だといえるだろう。とはいうものの、現実には日本の若者たちはその日本語元来のルールを完全に無視し、上記のような独創的な表現を次々に生み出している。なお、「～系」のほかに、「おうち帰りたい病」、「イチゴは先に食べる派」、「みんな来る説」などの言い方からも、若者ことばにおける（準）接尾辞の非文法的表現の広がりが見て取れる。

規範や伝統を代表する大人たちのひんしゆくを買っていても、日本の若者たちは、依然として、仲間どうしの日常的会話に「かわいい系」などと気軽に言う。では、何が理由で、若者たちにそういう非文法的な「～系」を多用させているのだろうか。その一つの可能性としては、おそらく若者たちの心理に大きく関わると思われる。山口

¹ 当該辞書の関連サイト：daijisen.jp/digital/index.html

仲美 (2007) は、「若者は、傷つきやすい。接辞をつけて表現を婉曲にし、それによって個人攻撃されるのを未然に防ぐ。また、相手への個人攻撃になるのを控える」(p. 138) と指摘している。つまり、若者たちは、文法的に「～系」の拡大使用によって、表現をソフトにする効果を狙うという心理が働いているのである。

2.2 「超～」

接頭辞の「超～(チョー)」は「～系」とともに日本語の常用接辞の一つである。その意味用法については、『日本語教育事典』(日本語教育学会、1987)を引用すると、以下のとおりになる。

1. 名詞などに付いて、程度がそれ以上であること、あるいはそれをさらにこえるものであること、他とかけはなれてすぐれていることなどを示す。(‘super-’の意味) (例) 超人的、超俗

2. 主に名詞に付いて、比較を絶していること、「とびきり」の意を示す。(‘ultra-’の意味) (例) 超満員、超自然、超微生物、超国家主義、超短波 (p. 419)

上記の 1. における「超俗」の「俗」はここに名詞なのかそれとも形容動詞なのかまだ議論すべきところがあるが、ほかの用例はすべて名詞につくものである。つまり、全体的にいうと、「超～」という接辞は、主に名詞に付いて用いられることがわかる。こういう文法的な条件は、若者ことばの生成や使用にも反映されている。例えば、「超素人」、「超マンガ」、「超学生」、「超圏外」などは、いずれも名詞につける語であるため、従来の使用条件に合致し、規範的で文法的な使い方だと思われる。

それにひきかえ、上記の規則に明らかに違反する言い方は若者ことばにたくさんある。例をあげると、「超気持ち悪い」、「超むかつく」、「超難しい」、「超いや(だ)」と、句、動詞、形容詞、形容動詞などにつくものが簡単に拾い集められる。

接辞の従来の用法をさらに拡大することは、いわゆる若者ことばの特徴的なところであるが、その格好の例が上記の「超～」であろう。

方韻・小出雅生 (2010) によれば、若者たちが接辞を愛用するのは、面白い語感や捉え方を出せるという点があげられる。「超むかつく」のような言い方の流行もそういう表現の誇張化や面白さによるところが大きかっただろう。また、「超～」を形容詞、動詞などの上につけることによって強めの言葉にするという心理も、この言い方の拡散に大きく関与しているといえるだろう。

3. 形容詞「すごい」の表現にみられる文法性と非文法性

「すごい」については、『明鏡国語辞典 携帯版』（北原保雄、2003）に、形容詞と明記され、「物事の程度が甚だしく尋常でないさま。ものすごい。」（p. 855）という語釈が載っている。品詞からも語釈からも、「すごい」が完璧な形容詞であることがわかる。従って、例えば、名詞を修飾するときに「すごい人」と、用言などを修飾するときに「すごく怒る」というように用いることは、言わば文法的な言い方である。

そういう法則は、若者ことばにも適用するわけである。実際、若者ことばには「すごい味」、「すごくむかつく」のような文法的な表現例が確認できる。ということは、日本の若者たちは、「すごい」という形容詞を用いる際に、形容詞ならではの活用条件や使用規則を維持することがある、ということを示してくれる。

しかし、一方では、若者による「すごい」の使い方には、普通の日本語の規則に違反するケースも多数ある。例えば、用言などを修飾する場合は、日本の若者たちは、「すごい寒い」、「すごいいや（だ）」、「すごいむかつく」のように言うことが多い。形容詞の修飾機能や活用法からみれば、上記のような諸形式は、「すごく～」のように言うのが普通で文法的な言い方であるが、該当の用例はすべて原形そのままの形をとっている。言い換えると、そのいずれも非文法的なものだといえる。にもかかわらず、若い人の中には「すごい+用言」の言い方がかなり広く用いられている。これについては、Sachiho Mori (2011) の集計があるが、以下のように引用しておく。

「すごい・すごく」を使用していた人数は、31 人中 17 人であり、半数以上の学生が「すごい・すごく」をスピーチに使用していることがわかる。（略）また、「すごい」の方が「すごく」より使用数が多かった。特に、17 人中 15 人が「すごい大変」のように「すごい」を副詞的に使用しており、「すごく」を副詞的に「すごい」を形容詞的に使用していた人数は、17 人中 2 人のみであった」（p. 46-47）

ごく初歩的な統計の結果ではあるが、「すごい+用言」が若者の間でどれほど愛用されているかがわかってくる。

また、「すごい」のほかに、若者ことばでは「ものすごい」、「やばい」、「えらい」などの形容詞もそのまま直接に用言などにつくことが多い。ということは、「すごい」が代表する一部の形容詞は、その非文法的な表現が広く若者ことばに使用されているということを物語っている。さらに、「すごい+用言」のような言い方は、広く認知されており、現在すでに一般的な言い方になりつつある。これは、前記の『明鏡国語辞典 携帯版』（北原保雄、2003）に「話し言葉では、「すごい」のまま、「すごく」同様、連用修飾に使われることがある」（p. 855）と明記されている

ところや、『問題な日本語』（北原保雄、2004）に「「すごいおいしい」などの言い方も、これだけ用法が固定しているのですから、単に形容詞の活用の誤りと見なして排除してしまうのではなく、「おそろしい」「えらい」「すごい」という形の副詞があると考えてもよい」（p.78）という記述からも裏づけられている。

では、若者ことばには、なぜそういう非文法的な使い方が現れているのだろうか。これについて、Sachiho Mori (2011) は、「すごい」が歴史的変化を経てそういう用法に至っていると考えている。これは、「すごい」と似た表現の「えらい・えらう」に関する増井典夫の分析に基づいて推測されているのである。増井典夫によると、「えらう」は、もともと「えらう美しい」のように用言を修飾していたが、寛政頃から「えらう」に変わって「えらい」の形で用言を修飾する用法が現れ、幕末頃には「えらい美しい」のように用言を修飾する「えらい」の頻度が「えらう」より高くなったことが明らかとなっている（Sachiho Mori, 2011: 47）。よって、「すごい」の副詞的用法は、若者の中で顕著に現れるのは日本語の歴史的な変化の結果なのではないかと Sachiho Mori (2011) が指摘している。

また、「すごい+用言」の「すごい」は、若者たちが強調語として使用しているようにも思われる。例えば、「すごく面白い」というと、その「すごく」は直接に「面白い」にかかっていくので、目立たない。かわりに「すごい面白い」というと、その「すごい」は連体形で「すごい人」のように名詞にかかっていくべきだが、そこには名詞がなく、「面白い」と予想外の語が続く。それで違和感がある。違和感があるということは、目立って強調されることである。こうして「すごい面白い」は「すごく面白い」よりも程度が強調されて感じられる。それは、結局、若者たちに好まれて、流行らせていったのではないかと考えられる（山口仲美（2007）参照）。

4. 形容動詞「マジ」の表現にみられる文法性と非文法性

前出の『デジタル大辞泉』には、「マジ（まじ）」は、「まじめ」の略で形容動詞とされ、その意味と用例について「本気であるさま。本当であるさま。「一な話」「一、うざい」と記してある。

「マジ」は、形容動詞であるため、例えば名詞にかかるときに「マジな話」と、用言にかかるときに「マジで言った」のように使うことが規則的で文法的な言い方である。実際、若者ことばにもそういう使用例が少なくはない。名詞に前接するものとして、「マジなやつ」、「マジな顔」があげられる。そして、用言に前接するものとして、「マジで恋する」、「マジに狂っている」があげられる。

名詞にかかる場合の「マジ」は、例えば「マジな話」のほかに「マジの話」の言い方もあるため、名詞に転成すると思われることがある。ただ、日本語においては、形容動詞と名詞の区分ははっきりしないことがあるため、従来問題視されてきている（『日本語教育事典』（日本語教育学会、1987）参照）。よって、本稿では、「マジの話」の表現を非文法的な形式だとはしない。これに対して、用言にかかるときに「マジむかつく」、「マジ面白い」、「マジ行きたくない」というのが非文法的な言い方だと考えている。なぜなら、名詞²はもちろんのこと、形容動詞でも上記のようなかかり方がないし、普通成り立たないからである。それは、言わば、形容動詞をそのまま副詞として用いて生まれた若者ことばならでの形式である。

このように、若者ことばにおける「マジ」は、「すごい」などと同様に、用法上のバリエーションに富んでいる語である。日本の若者たちが「マジ+用言」などの形式を愛用するのは、さきに触れた「すごい」と同じく、オーバーな気持ちを強調したい、伝えたいという心理に関わっていると思われる。

5. 名詞「ツボ」の表現にみられる文法性と非文法性

「ツボ（つぼ）」については、『明鏡国語辞典 携帯版』（北原保雄、2003）に名詞と明記され、人体の定まった部位や要点などを意味すると示されている。若者ことばにおいても、「ツボ」は、その名詞の機能を十分に果たす語例があるが、簡単に示すと、「ツボにはまる」、「笑いのツボをわかっていない」などがとりあげられる。

しかし、「ツボ」は、先の「～系」や「すごい」と同様に、従来とは全く異なる用法を示す場合がある。それは「ツボな人」、「ツボなアイテム」というような使い方である。ここにある「ツボ」はすでに名詞ではなくなり、完全な形容動詞に変身している。

現代日本語には「ツボな～」と同じような言語的現象がある。「問題な日本語」、「神戸な人」、「味な企画」、「大人なイメージ」などがその典型だと考えられる。こういったいわゆる非規範的で非文法的な言い方に対しては、どのようにして合理的な解釈ができるのだろうか。いまだに完全に釈明されるまでにはなっていないが、村木新次郎（2012）の個人的見地から出発した分析がある。次のようである。

名詞である「神戸」「ニュース」「土壇場」を「～の」を介してではなく、「～な」にスライドさせて用いると形容詞になる。この品詞の転成は、意味の変化をもたらす。実体（あるいは対象）を意味した名詞が形容詞にかかわると、その実体がそなえている属性へと移行する。（p. 244）

² 時点や期間を表わす名詞には単独で副詞的に用いる用法があるが、そういった名詞を本稿の範囲外とする。

言い換えると、元来名詞であるものが、それを形容動詞として用いられるのは、その名詞のもつ実体的意味が背景に退き、属性の意味が前面に出ているととらえることができる時点で、はじめて形容動詞化が成り立つということである。

村木の指摘からさらに進んで考えてみると、若者ことばにみる形容動詞化された「ツボ」の成り立ちがわかる。

「ツボ」は、要点や急所を意味するときには間違いなく名詞であるが、「個人特有の好み」などを意味する際に、「ツボ」に含まれる属性の意味合いが前面に出ている。この場合、もともとの要点などの実質的な意味が薄れてしまい、「個人特有の好み」や「抜け出せないことがしばしばある部分・状態」（北原保雄（2006）参照）という属性や性質などの意味があらわになるため、結局形容動詞と同じような意味機能を担せるようになるのである。

このように、伝統的な立場からすれば非文法的な言い方ではあるが、ある種の属性的な意味合いを伝えたいときに、当該名詞を形容動詞化して使うのである。若者たちも、無意識のうちにそういう言語表現の手段を生かし、「ツボな人」とか「ツボなアイテム」とかいう新しい用法を生み出しているのではないかと考えられる。なお、「ツボ」のほかにも、「腐女子な彼女」、「電波な人」、「萌えな店」なども若者ことば的な表現例がある。

6. おわりに

ここまで分析してきたように、日本の若者たちは、通常の日本語の規則や規範を維持する一方、それとは異なる新しい用法や表現を創出し、活用している。それは、結局、若者ことばに文法性と非文法性の表現が同時に現れているという面白い言語的現象を生み出しているのである。

実際、非文法的な表現であって、一見ヘンなように見えているが、その奥に潜んでいる深層的な産出要因を突き止めると、意外に一理ある部分も垣間見える。若者ことばの文法性と非文法性の表現からさらに一步進んで考えると、言語というものは、こうして、変と不変という移り変わりの道のりを辿りながら発展してきたのだということがいえるのではないだろうか。

若者たちは、いつの時代にも規範的でないもの、伝統的でないものを好む傾向がある。それはいわゆる新しい用法や非文法的な表現を生み出す大きな要因になる。そして、そうしたものに新鮮さや新奇さを感じる時、それらは繰り返され、「すごいおいしい」のように定着へと向かう可能性がある。従って、非文法的な若者ことばにぶつかっても、好意的にそれに目を配る必要がときにはあると本稿は指摘したい。

また、今後の展開としては、最新の生の若者ことばを対象に綿密な調査をしながら、その文法性と非文法性の表現がどのぐらいの割合で使用されているのかを明らかにしたい。

補記

本稿は住友財団「2013 年度アジア諸国における日本関連研究助成」（助成番号：138011）による成果の一部である。なお、本稿の作成にあたり、査読者より貴重な助言をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

用例出典

- ・北原保雄（監修）、「もっと明鏡」委員会（編集）（2006）『みんなで国語辞典！これも、日本語』東京：大修館書店
- ・渋谷語制作委員会（2008）『渋谷語事典 2008』東京：トランスワールドジャパン
- ・方韻・小出雅生（2011）『时尚日语』合肥：中国科学技术大学出版社
- ・<http://www.yahoo.co.jp/>（2014年9月-10月アクセス）

参考文献

- 北原保雄(2003) 『明鏡国語辞典 携帯版』東京：大修館書店
- 北原保雄(2004) 『問題な日本語』東京：大修館書店
- Sachiho Mori (2011) The Language of Young People and Its Implications for Teaching. *Outside the Box: The Tsukuba Multilingual Forum*, 4-1:46-49.
- 日本語教育学会(1987) 『日本語教育事典 縮刷版』東京：大修館書店
- 方韻・小出雅生(2010) 「辞書にない日本語—若者言葉を中心に」刘晓芳(主编) 『日语教育与日本学研究』上海：华东理工大学出版社, 208-211
- 村木新次郎(2012) 『日本語の品詞体系とその周辺』東京：ひつじ書房
- 山口仲美(2007) 『若者言葉に耳をすませば』東京：講談社
- daijisen.jp/digital/index.html (『デジタル大辞泉』、2014年10月07日アクセス)